

サロン・あべの

サロン・あべのNO. 10

昭和62年4月18日(土)発行

昭和六十二年三月十四日(土)

午後一時から、育徳コミュニティセンターにおいて、ハサロン・あべのV三月の出会いが開かれた。

あいにく、どしゃぶりの雨、足もとが悪いにもかかわらず、十四名が集う。この中には、旧青年ボランティアグループのメンバーの顔もみえ、明るく、はなやいだ雰囲気のうち、お・か・しを囲んだ。

サロンの生みの親であり、育ての親でもある岡さんが、上智大学への赴任が決まり、送別会を兼ねての出会いとなった。

おかし＝岡氏と お菓子＝を囲んでの語らいは 自然とハサロン・あべのVのことに……

サロンでは、してあげる介助、提供者意識をもった手助けなど、精神的上下関係を感じることはない。いかえれば、ボランティアする人、される人の枠がなく、障害の種類、障害のあるなしに関係なく、お互い

助け合い、本音の発言、行動、付き合いが出来るボランティア グループといえる。これからボランティアグループとしてのサロンが障害者と健常者が出会う場、ふれあう場、助け合う場作りをしていくにはどうすればよいか、注意する点はー おかしを囲んでの話はすゝむ。

お・か・しを

囲んで

——二月の出会い

サロンの講演会やパネルディスカッションなどに、参加してきた人々に心をこめて対応することが大切である。そして、参加者みんなが、いきいきとした社交の場を、サロンの中で求められるよう、もてなしをしなればいけない。誰とも話をせず

に帰っていく人がいたとする。これではまだまだ気づき方がたりないし研究もたりない。誠心誠意ふれあっていくうちにやって来た人が自分はサロンの者であるという所属意識をもつようになり、サロンでの自分の役割や、位置の確認をするといったいわゆる自己承認の欲求を充すようになる。

こうなると、はじめて、ボランティアとしてのサロンの価値がでて来るのではないだろうか。

最後に、つけ加えて岡さんは ちょっと途絶えているが、毎月の出会いの最後に、ミニ手話教室を、皆でしていたが、これはサロン独自の文化として、今後も続けていけば……と。

岡さんの赴任地は、大阪から遠くはなれていても、気持は今迄通り、サロンの近くにあって、時には温かく、時には叱咤してサロンを大きく育て、いただくよう、お願いして、三月の出会いを終った。

「もてなし」のボランティア

前回、サロンはあまりにもボランティア的なボランティア活動であると書いたが、やや抽象的な説明だったので、今回はそれをもう少し具体的に書いてみたい。

ボランティアとしてのサロン活動は、ひとことと言えば「もてなし」ということだと思ふ。手元にある辞書で調べてみると、「もてなし」とは「客を心をこめて応対すること」とある。狭い意味では「客に心をこめた茶菓・酒食を供すること」であるという。

やって来る人を「心をこめて応対すること」にこそ、サロンにおけるボランティア活動の本質がある。「心をこめて」という点が大切だ。表面的に「ハイハイ、そうですか」などと応えてはいけないのである。

だから、例えばサロンで講師を招くこと

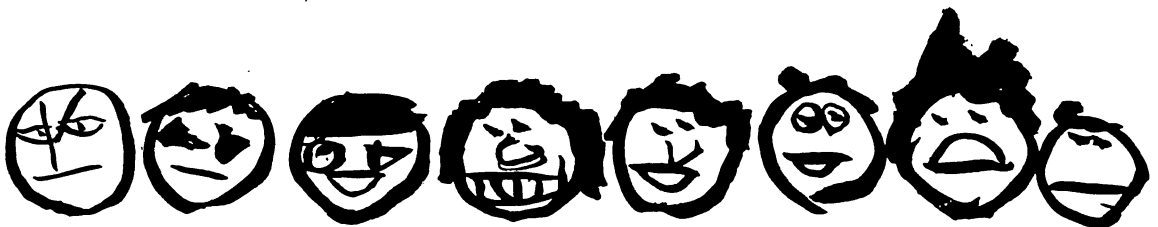
を考えたときに、講師との打ち合わせや会場の準備なども重要だが、それだけに終わってしまい、講師の話が始まれば「やれやれ、これで一休みできる」と、あとは「客」のような顔をして講演を聞いてしまっているとしたら、本末転倒であろう。それでは「講演会の準備活動」であって、「サロン活動」であるとは言いがたい。

講演会やパネルディスカッションをして、それは「心をこめて応対する」ための「材料」にすぎない。ちょうど「客」に「茶菓・酒食」を出しても、それは「心をこめて応対する」ための「間」をつくるためにすぎないのと同様である。

サロンにおいては、会場の準備や司会をする最も大切な活動だが、ボランティア活動として最も重要なのは、初めてサロンに来た人、またサロンに来てはまだ「よそ者」気分が抜けない人を「心をこめて応対すること」にあるのである。

だから、講演がどれほど成功しようとも、誰とも話をせずに一人で来て一人で帰る人がそこに一人でもいたのなら、それはサロンとしては失敗であったと言わなければならない。

(知)



THE DEAF MUTE

1

純子 旭



ろうあ者の持つコミュニケーション障害は、生活の基本をなす家庭生活の場において、深刻な影響をもたらすことになる。個人に対する望ましい家庭機能として、「家庭内で個々の家族員のパーソナリティの助長発達」「家族間の高度で健全な役割相補性」「地域社会への積極的な適応」の三機能があげられているが、ろうあ者は彼らの

有する障害によって、これらの家庭機能の恩恵を受けることが困難であるばかりでなく、家族との意志疎通も十分に図れず、家庭の中でひとり取り残されてしまうこともしばしば起こるのである。

例えば、健常者の家族（両親・兄弟・祖父母等）と生活しているろうあ者の中には、家族同志の会話が理解できず、本来ならば最も心の安定・充足を感じることのできるはずの一家の団らんにも、ひとり融けこめず、疎外感を味わっている者も多い。実際「家においてもおもしろくないから、仕事が終わったら手話サークルに行ったり、ろう学校の時友達と会ったりして、帰宅は毎日遅くしている。家族というより、手話サークルの友達や、ろうあ者同志でいる方がずっと楽しい」と話するろうあ者が、筆者の周囲にもかなりいる。

プロフィール

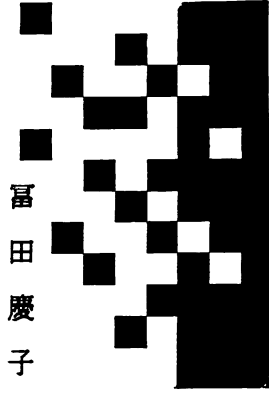


大島 功 さん

いつも背筋をピンと伸ばし、ケリア君（盲導犬）の道案内で、どこへでも出ていられる超行動派の大島さん。大きな声なのに優しく聞えるのは、ていねいな言葉使いだからなのか。よく解る言葉順でひとつずつ押えるように話して下さる。

中途失明で、本来なら動きの取れない状態と思われるが、持ち前のフアイトでやるき満々。福祉誌「わがまち」の発行者をはじめ、多くの仕事を持ち、知識、お顔とも非常に広い。ハサロン・あべのVの発起人の一人として、助言、企画、対応など様々な事柄の良きアドバイザーである。が、時として現時点のサロンではまだまだ力不足のためとまどってしまいうほど、大きな構想が出てくることもある。一日も早く、大島さんの想いに追いつき充実したハサロン・あべのVにしていきたいものと思う。

車イスとのつきあい



富田慶子

私をはじめ「車イス」を知ったのは、映画「アルプスの少女」を観た時です。それから何十年も過ぎてから、自分が必要になるとは、夢にも考えていませんでした。

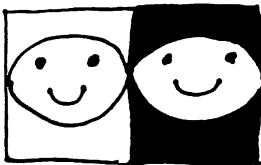
私が車イスを使いたしたのは、八、九年前からです。それも、外出する時だけ使用して、家の内にいる時は、松葉杖をついていますので、車イスとのつきあいも他の方から見れば、浅いものと思います。

それに、手動車イスは、私の手では動きませんので、今はもっぱら電動車イスを使

用しています。と言いましても、臆病な者で遠出をしたことは無く、近所周りをするぐらいのものです。

昨年のあべのボランティアビューローのスクールで「車イスの介助」の講座があり私は、初めて車イスの乗り方について（本当は、車イスの押し方の学習）知りました。車イスで、歩道の段差の上り下りや、歩道橋の上げ降ろしの実習に参加して、介助して下さる方の気配り、労力の大変さを知りました。よほど、体力に自信が持たないと街で車イスの人を見かけても、声をかけられない。と言った人の気持が解る思いがしました。聞いた時は、そんなこと思わないで、一人で介助してもらうのではないのだから 四、五人の人にお願ひして：（労力は四等分になり、重くは無いのだから）と、考えていたのです。ところが、乗って感じたのですが、歩道橋の幅が狭くて車イスを抱えて、四、五人がさっと上れる状態ではないのです。先生は、慣れるとコツが解ります、と言っておられました、快く介助をして下さる方のしんどさを

忘れてはいけないうつくづく思いました。車に弱い私は、手動車イスでも長く乗っていると、気分が悪くなってきてこまります。美術館や博物館などでは、いつも最後の方は生アキビが出て観賞どころではありません。横揺れる車イスは良くありません。と実習の先生が言っておられました。私の場合、そればかりでは無い気もします。ハイジとクララは車イスから解放されましたが、これからの私には、第二の足として増々必要になってくることでしょう。人と出合いを作ってくれる車イスに感謝しながら付き合っていきたいものです。



精神的上下関係

山本篤江

先日、サロンでうっかり口を滑らせてしまつて、新人類ならぬ、新語をいってしまった。それが今から、からっぽの頭をしぼって書こうとしている、「精神的上下関係」なのです。

私自身、この言葉を口にしたのは、つい最近のことなのです。障害を持っている人持っていない人、いわゆる、障害者とボラティアとの人間関係とでも言いましょうか？

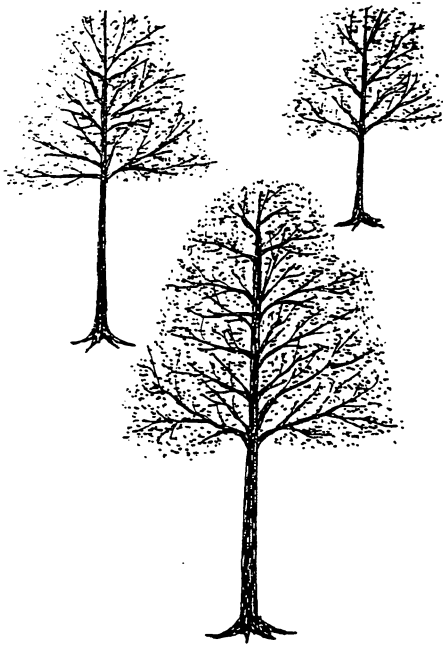
ボラティアの人との出会いは、何かの介助をきっかけとして、知りあいになります。大なり小なり自然とやってもらつたう気持をもつものです。それが当然な事だと思ひます。私ぐらいの年齢になりますとどうしても私の方が年上になってしまいます。妹、弟に手伝って貰うという事になり

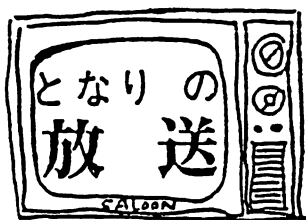
ます。考えてみてください、妹、弟に何かを頼むなんて「イヤ！」でしょう。ボラティアの人もしごく神経質になっているのがよく解るのです。年上として付き合えばいいのか、また、友達として話をすればいいのかで、自然とそうなるのでしょう。在

家庭の人は特にそれが強いと思うのです。それを解っていないからお互いどうする事も出来ずにいるのが、大半の障害者とボラティアではないですか？

今迄、取りとめのないことを言ってきましたが、一言でまとめてみると、年下の人によつてもらねばならない、障害者の解みみたいなものなのでしょう。

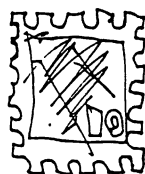
でも、私達も、僻んでばかりはいられません。物質的に出来る事が少なくなつてもそれに代わる何かを身につけるのが、私達の課題だと思ひます。





まごころの集い社

切手販売



まごころの集い社では
使用済み切手を収集・整
理をして、バザーやホー
ムで趣味をお持ちの方々
に販売して、その収益を
会運営の一部に当ててい
ます。ご不用の切手があ
りましたら、よろしくお
願い申し上げます。

日時 5月9日～10日

10時～16時

場所 宝塚市立図書館

(清荒神下車徒歩)

日時 5月24日

11時～14時

場所 中之島公会堂(3F)

〇問い合わせ先

富田慶子 TEL06-691-1028

お知らせ

△サロン・あべのV五月の出会い

日時 昭和六十二年五月十六日(土)

午後一時～四時

場所 育徳コミュニティーセンター二階

研修室(エレベーター・車椅子利用可)

内容 「障害者と結婚」―手話通訳有り。

障害者の結婚を皆さんと一緒に
考えてみませんか。

会費 なし(カンパ大歓迎)

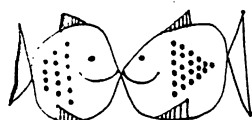
連絡先 電話〇六一六九一一〇二八富田

日々のよろこび添えて

サロン・あべのに贈る灯り

三月のカンパ合計三五〇〇円

ありがとうございました。



編集後記

三月の出会い「お・か・しを囲んで」で
は、みなさまから、サロンに対する、建設
的なご意見が、いっぱい出され、二年目の
サロンにとって、心強い限りです。その日
のお茶うけにと、山本敏子様より、ドーナ
ツを頂戴いたしました。ご馳走さまでした。
サロン・あべの一周年記念紙(第九号)
の増刷が出来ました。お知り合いの方々に
お渡しいただいて、大いにP・Rをして下
さす。